

受難の主日（枝の主日）

福音朗読 マタイ 27・11-54

2023.4.2 11:00 ミサ
カトリック高円寺教会
主任司祭 高木健次神父

わたしたちは毎年、枝の主日、受難の主日と聖金曜日に、イエス様が十字架に架けられて亡くなられたということを記念いたします。それは、実はその二日間だけではなくてミサのたびごとになんですけど、受難の主日と聖金曜日には特にそのことを強調して思い起こします。そのことには二つの目的があるように思います。

一つは、今日の受難の朗読の中でイエス様が十字架上で父である神様に対しておっしゃった、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」（マタイ 27・46）という問いへの答えを確認するためです。「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」の「なぜ」って、日本語で言うと原因を問うているように聞こえますが、もともとの新約聖書の古代ギリシア語の単語はむしろ目的なんです。「何のためにわたしを取り残されたのか」「見捨てる」というか、「十字架の上に残しておかれるのか」という問いです。何のためにイエス様は十字架に架かったのか。第三者的に言えばそういう問いを、イエス様はご自分のものとして十字架上で問われるわけです。

その答えは、イエス様が全ての人と共にいらっしゃって、全ての人を父である神様のもとに導くためである、ということをおわたしたちはいつも典礼を通して確認していると言えます。イエス様が全ての人、とりわけ、今「なぜお見捨てになったのですか」ってイエス様の言葉にあるような、神様から見捨てられたような孤独の中に、あるいは苦難の中にある人々と共にいらっしゃり、そして全ての人を神様の恵みのうちに導くために、イエス様ご自身がその場に身を置かれたのだと、わたしたちはいつも信仰のうちに告白いたしています。そういう意味では、イエス様の十字架の意味を確認するとともに、一人ひとりが体験しているいろいろな人生上の苦しみや困難、苦難の中でイエスと出会う、一つはそのためですね。イエスと出会う、イエス様の十字架の意味を、十字架の目的を確認し、そしてイエス様がわたしたちと共にいらっしゃるのだということをお思い起こす。

一人ひとりが苦難の中で、自分の中だけに残り残されない、そういう思いを新たにすること、一つの目的です。

そしてもう一つは、かつて人として来られたイエス様は、全ての人から見捨てられて十字架上で一人その苦しみを受けられたけれども、信じる者の集まりである教会は二度とイエス様をお一人で十字架の上に取り残すことはしないのだという思いを新たにすることです。既に過去の出来事になってしまったイエス様の十字架の出来事を、「もう二度と取り残さない」とはどういうことか。それは、今苦しみの中にある人、孤独の中にある人と共にいらっしゃるイエス様ですから、今の苦しみや孤独、困難の中にある人をそのまま放っておかないという教会全体としての一つの神様に対する約束というか、あるいは自分たちがそのような約束に適う者になりますようにという力を願うと言いましょか、つまり、他の人の苦しみに対してわたしたちは「自分には関係ない」って言わない、そういう思いを新たにすることです。

イエス様の十字架に対して、ピラトは「それはわたしには責任がない」って言います。一方で、群衆は「その血はわたしたちとわたしたちの子孫の上に」って言います（マタイ 27・24-25）。その文脈から言えば、群衆の言葉っていうのは単に、ピラトが「これはわたしには責任がない」って言ってるから「いや、いいです。あなたにはご迷惑をおかけしませんので、わたしたちの言う通りにイエスを十字架にかけてください」っていうだけの意味ですけども、しかし聖書に記されたその言葉そのものは、実は当時の群衆のそういう思惑を超えて、人の苦難というものはピラトの「その人の苦しみはわたしには責任がない」っていう態度と正反対の、「その人の苦しみはわたしたちにあるんだ」っていう両極を表わしています。で、それが、当時のイスラエルの群衆が言った言葉を、当時の群衆のそういう表面的な思惑ではなくて、神の民の思いとして、「イエスの十字架の苦しみはわたしたちに責任がある」、そしてそこから繋がって、今苦しんでいる人、孤独の中にある人、困難のうちにある人に対してわたしたちはピラトのように「関係ない」と言うのではなくて、その責任を共に感じて一緒に担う。「いろんな形で苦しんでいる人たちはその人たちの問題だから」と言わないんだという、そういうためにわたしたちもイエスの十字架の出来事の意味を知らされた。そして、その十字架のもとに集まっている、っていう思いを新たにすることです。

しかし、他の人の困難と共にあろうとするときには、わたしたちは自分自身の人生の困難の中に閉じこもっていたのではそれができない。だからこそ、自分の

困難の中にあるイエス様、そのために十字架に留められたイエス様が、今も共に居てくださるのだということを思い起こす。だから、最初の目的、イエスの十字架の意味を確認し、一人ひとりの苦難の中にイエス様が共にいらっしゃる、そのイエス様と出会うということと、それから、他の人々の苦難を教会全体として共に担うことを通して、十字架の上でいらっしゃるイエス様をただお一人取り残さない、その二つの互いに結び合っている目的を確認する。それが主の受難、十字架の死の記念を行うわたしたちの典礼の目的であると思います。

一人ひとり、それぞれいろんな形で困難を抱えていらっしゃるかもしれません。ほんとに「何のためにこの苦しみがあるんですか?」、その答えはすぐには見い出せないし、完全には天国での神様のもとに行ったときに全て明らかにされる希望ですけども、しかし、自分の苦しみを体験しているからこそ、同じような苦しみの中にある人のことを思い遣り、そのために祈ることができる、という面もあることは事実だと言って良いんじゃないかなと思います。そうして互いの、イエスと繋がりそしてお互い同士が苦しみのうちにあって繋がるという、人と人とが互いに苦しみによって分断されるのではなくて、繋がっていく。

おんなじ苦勞をしても、そのことがかえって自分を閉じてしまうってことも往々にして起こり得ます。周りの人に対して「そんなあなたの苦勞なんて、わたしが体験している苦しみに比べたら取るに足りない」って、お互いに、実際に言わなかったとしても、心の中で言い合う。そういう関係になる可能性もあるんです。でもそうではなく、その中でイエス様に出会い、そしてお互い同士を苦難の中に取り残さない、また、分断されないためにイエス様が十字架に留められたし、わたしたちはその十字架上のイエスに出会うように呼ばれたんだっていうことを思い起こしながら、共に歩むための忍耐と勇気と知恵、ひっくるめて言えば愛を神様から頂く。

イエス様に出会い、その愛を頂くことができますように、改めてその十字架のもとにわたしたちを呼ばれたイエスご自身の呼び掛けに心を開き、そして神様の恵みに、一人ひとりの限界のある心ですけれども、導きを願いたいと思います。

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>

携帯 <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>